

スピノザの哲学における本質の問題

柴田健志

はじめに

『エチカ』第二部定義2によれば、事物の本質とはそれなくしては事物が存在しえないものであるが、同時に「事物なくしては存在することも考えられることもできないもの」(Eth.II.D.2)である。

以下で議論される問題の焦点は、この引用文に含まれる「事物」が現実存在する「事物」を意味すると解釈してはどうか、という点にある。というのも、従来からの解釈によれば、個物の本質は現実存在とは別の存在領域において決定されていると考えられるからである。ひとこと言えば、従来からの解釈は間違っているのではないか、というのがこの論文の主張なのである。

実際、『エチカ』のテキストを再構成していくと、各個物が現実存在へと決定される論理の中に、まさにその個物の本質が決定される論理を認めることができる。つまり、スピノザにおいて、本質は現実存在とは別の存在領域において考えられていないのである。

この解釈を主張するには、本質と現実存在を争点にして『エチカ』のテキストが再構築されなければならない。再構築の手順は以下のようなものである。(1)「ゲルーとドウルーズに代表される従来からの解釈の批判」(2)『エチカ』第一部の存在論の再構築による新解釈の提案。(3)『エ

チカ』第二部の身体論の再構築による新解釈の敷衍。以上を踏まえ、この解釈が何を含意するかという点について最後に述べる。

1 本質と現実存在

新解釈を提案する前提として、本質と現実存在という二つの存在領域の区別にもとづく従来からのスピノザ解釈の問題点を指摘しなければならぬ。ただし、以下の論述は解釈の争点となる問題点のみを明確化することを目的としているので、代表的な解釈としてマルシャル・ゲルーおよびジル・ドウルーズの解釈を取り上げる。以下において解釈の主要な対象となるテキストは『エチカ』第一部定理24および25である。

定理24は「神から産出された諸事物の本質は現実存在を含まない」(Eth.II.4Pr.)という定理である。この定理は後に何度か取り上げることになるが、その意味は極めて明白である。個物の本質には現実存在は含まれていないということは、個物はそれ自体を現実存在に決定することはできないということを意味するのである。したがって、個物が現実存在するには神による決定が不可欠であると考えられるのである。しかも、この点は定理24の系において明言されている。「神は諸事物が現実存在し始める原因であるだけでなく、また諸事物が現実存在に固執する原因でもある、・・・ということがここから帰結する」(Eth.II.4Cor.)。

定理25は「神は事物の現実存在だけでなくその本質をも生み出す原因 (causa efficiens) である」(Eth.II.5Pr.)という定理である。テキストを素直に読めば、神は事物を現実存在に決定する原因であるが、それ

と同時に事物の本質を生まみ出しているということになるであろう。

ではこれらのテキストについてゲルーフはどんな解釈を与えているのだろうか。ゲルーフは『エチカ』第一部定理24および25において現実存在に対する本質の優越が認められると述べている。「定理24および25は現実存在の地位が本質の地位によって条件づけられる限りにおいて現実存在について語っている」(Guerout 1968: 325)。個物の本質と個物の現実存在という二つの存在次元を認めるような解釈においては、暗黙のうちに本質の優越が認められているという点がここで指摘できる。このような解釈上のフレームを設定すると、諸個物の本質は現実存在とは独立に決定されていることになる。

では、それらはいったいどのような論理で決定されているのだろうか。この点が問われなければならないはずである。ところが、ゲルーフはその点を問う必要がないという。なぜなら「いかにして」についての探求は、実際にここでは表面的なものにすぎない。というのも本質とは永遠のものである」(Guerout 1968: 325)。永遠なものについてはその決定の過程を問うこと自体が無意味であるというのである。個物の本質がいかにして決定されているかについて、『エチカ』は何も語っていないということにされてしまっているのである。この帰結を見れば、現実存在に対する本質の優越をこの定理に読み込むことは重大な問題があると認めざるをえないだろう。

また、定理25および系について、ゲルーフはその内容が曖昧であることを指摘しているが、重要なのはそれらが曖昧であるとされる根拠である。「定理25および系はきわめて曖昧である。というのもこれらは諸事物の本質について語っておきながら、現実存在についても語っている

からである」(Guerout 1968: 330)。

しかし、これは事実には反する。「神は事物の現実存在だけでなくその本質を生まみ出す原因 (causa efficiens) である」(I.25Pr.) という定理25のテキストを素直に読めば、神は事物を現実存在に決定する原因であるが、それと同時に事物の本質を生まみ出しているということになるであろう。つまり、ゲルーフがいうのとはまったく逆なのである。ゲルーフは現実存在に対する本質の優越という解釈上のフレームにテキストを従わせようとしているにすぎないのである。

いうまでもなく、このような指摘はゲルーフのスピノザ解釈全体を否定することを意図しているのではない。むしろ、個物の本質は現実存在の次元で決定されるという解釈の可能性を主張するために、個物と現実存在の区別を前提した解釈がテキストの読みを著しく歪めていると思われる箇所をあえて取り出しているだけである。同様の意図にしたがって、次にジル・ドゥルーズの解釈を見ておこう。

ドゥルーズの解釈もゲルーフに見られるような本質と現実存在の区別を前提しているが、より洗練された形になっている。ドゥルーズは個物の本質そのものが現実存在することを認める。この点は正しい。神の本質は現実存在することであり、また「すべてのものは神の中にある」(I.25Pr.) とすれば、個物の本質もまた現実存在しているのでなければならぬと考えられるからである。

ところがドゥルーズは、個物の本質の現実存在を個物の現実存在から区別して次に述べている。問題はこの解釈にある。「様態の本質には現実存在があるが、それは対応する様態の現実存在と同じものではない。たとえばそれが本質となっている様態が現実存在していなかったと

しても、様態の本質は現実存在しており、実在的で現実的なものである」(Deleuze 1969: 174)。非常に晦渋な言葉づかいであるが、要するにスピノザの存在論においては様態(個物)の本質が現実存在の次元で考えられていることを認める一方、それを本質とする様態の現実存在をそこから区別することによって、本質と現実存在の区別というフレームを維持しようとしているのである。

この解釈を受け入れるならば、個物が現実存在に決定されていないくてもその本質だけは現実存在に決定されているということにならないであろうか。まさしくドゥルーズ自身がそうなると明言している。「神から産出された諸事物の本質は現実存在を含まない」(EhI.24Pr.)と「定理24は「本質は様態の現実存在の原因ではない」(Deleuze 1969: 175)と「このことを意味するとドゥルーズは述べている。つまり、様態が現実存在に決定される以前に本質は現実存在に決定されているが、それは個物の現実存在には関与していないというのがこの定理の意味だ」というのである。この読みもまたきわめて不自然な読みであるといわざるをえない。

いうまでもなく、このような解釈はスピノザによる本質の定義に明瞭に反する。繰り返し引用するが、本質とは「事物なくしては存在することも考えられることもできないもの」(EhI.II.D2.)なのである。個物(様態)が現実存在しなくても現実存在する本質とはいったい何の本質なのであろうか。また仮に、ドゥルーズのいうとおり個物の現実存在から区別された本質の現実存在があるという点を認めたとして、それは属性の中でいったいどうやって差異化され、特異性を持ちうるものであろうか。ドゥルーズが本質と現実存在の区別および本質の優越という解釈の

フレームを維持する限り、ゲルーと同様この問いかけに対して正面から答えることはできないであろう。

このように、本質と現実存在に関する伝統的なフレームに固執すればするほど、スピノザの本質概念の理解からは遠ざかってしまうように思われる。それゆえ、本質それ自体が現実存在における決定の連鎖の中で決定されるという、以下で展開する解釈が成立する可能性は十分残されているように思われる。

2 個物の本質

『エチカ』第一部定理25によれば、「神は事物の現実存在だけでなくその本質をも生み出す原因 (causa efficiens) である」(EhI.25Pr.)。神は事物を現実存在に決定する原因である。しかしそれだけでなく、事物の本質をも生み出しているという。この構文(現実存在が主で本質はそれに付随して言及されている)に注目すれば、事物を現実存在に決定すると同時に本質をも決定しているという読みが成立するであろう。

この読みの可能性を検討するにあたって注目すべきテキストは定理25の系である。「個物とは実体の変容すなわち神の属性を一定の決定された仕方で (certo, & determinato modo) 表現する様態に他ならぬ」(EhI.25Cor.)。

定理25とその系の関係が重要である。定理25によれば、神は個物を現実存在に決定すると同時に本質をも決定している。その系として、各々の個物は「神の属性を一定の決定された仕方で表現する」ということが出てくる。ということは、「神の属性を一定の決定された仕方であ

現する」ことが個物の本質であるということになるだろう。実際、「コナトゥス」の概念に着目することによって、「神の属性を一定の決定された仕方では表現する」ことがまさしく個物の本質であるという点が明瞭に確認できる。

『エチカ』第三部定理7によれば、「コナトゥス」とは「事物がその存在に固執する」作用であり、それが「事物の現実的本質」(Eth.III.7.Pr.)である。この定理は『エチカ』第一部定理25の系からの帰結として理解することができる。これら結びつけるのは『エチカ』第一部定理36の証明である。「神の属性を一定の決定された仕方では表現する」(Eth.I.25.Cor.)というフレーズは「神の本性あるいは本質を一定の決定された仕方では表現する」(Eth.I.36.Dem.)とパラフレーズされる。どのような属性においても「神の本質」が表現されているからである。ところで「神の本質」とは「神の力 (potentia)」(Eth.I.34.Pr.)であると考えられるがゆえに、このフレーズはさらに「神の力を一定の決定された仕方では表現する」(Eth.I.36.Dem.)とパラフレーズされる。現実存在する個物は神の力を表現する存在なのだ。

『エチカ』第三部定理6では個物が「自己の存在に固執する」(Eth.III.6.Pr.)という本性を持っていると主張される。個物は「神の力」を表現する存在だからである (Eth.III.6.Dem.)。これを受け、『エチカ』第三部定理7では「自己の存在に固執する」という個物の本性が「コナトゥス」(Eth.III.7.Pr.)という概念に集約されるのである。以上のつながりをたどると「神の属性を一定の決定された仕方では表現する」(Eth.I.25.Cor.)とそれぞれ自体が「事物の現実的本質」(Eth.III.7.Pr.)であることになる。

なお、スピノザが「現実的本質」という用語法を使うのは「可能的本質」を認めているからではない。むしろスピノザの意図は「本質」とは「現実的」なものであるという点を確認することにあると考えられる。つまり、「可能的本質」を認めないというのがこの用語法の意味である (Laerke 2018:34)。

以上を整理すると、「神の属性を一定の決定された仕方では表現する」ことがなぜ個物の本質であると考えられるかという問いに問題が集約できるはずだ。現実存在における決定の論理を個物の差異化の論理として解釈することによって、この問いに対する解を提案することが以下の課題である。

このフレーズに含まれる「表現」の概念には次のような問題点が含まれている。一見すると、個物とは神の「変容」であるという論理から個物の特異性が直ちに帰結することはないように思われる。なぜなら、すべての事物は神の属性の「変容」にすぎないのだから、それらの本質は神の属性の本質と同一であると考えうるからである。すなわち、諸個物は属性という同一性の複製として理解される。そのように理解された場合には、諸個物の区別はたんなる数的区別であることになるだろう。実際、個物はそのような側面から十全に認識されうる。スピノザによれば、すべてのものに「共通」するものを認識することが「理性」であるが、「神の本質」の認識を与えるものはすべてのものに「共通」である」と明言されているのである (Eth.II.46.Dem.)。

ところが、諸個物はただ数的にのみ区別されるのかといえばそうではない。神の属性を「表現」している限りにおいては、諸個物の区別は確かに数的区別である。しかし、すべての個物が同じ仕方では「表現」して

いるのではない。「一定の決定された仕方で」というフレーズが意味するのはこのことである。したがって、諸個物の区別にはたんなる数的区別以上の差異化が含まれていると考えるのが自然である。それはいったいどんな差異化なのだろうか。

この問いかけに対する解は、すでに何度も言及した『エチカ』第一部定理24から導くことができる。「神から産出された諸事物の本質は現実存在を含まない」(Eth.I.24.Pr.)。個物が神の属性を「表現」するには現実存在していなければならないが、この定理によれば個物の本質は現実存在を含まない。したがって「表現」する以前に、現実存在に決定されていなければならないのである。では、個物はいかにして現実存在に決定されるのか。現実存在する他の個物によってである。

「あらゆる個物すなわち有限でかつ限定された現実存在を持つ各々のものは、同様に有限でかつ限定された現実存在を持つ他の原因によって現実存在しかつ何ごとかをなすように決定されるのでなければ、現実存在することも何ごとかをなすように決定されることもできない。そしてこの原因もまた、有限でかつ限定された現実存在を持つ他の原因によって現実存在しかつ何ごとかをなすように決定されるのでなければ、現実存在することも何ごとかをなすように決定されることもできない。こうして無限に進む」(Eth.I.28.Pr.)。

テキストに何度も出てくる「他の原因」とは他の個物のことである。他の個物は神の「変容」として現実存在するものである。その「変容」がさらに「変容」することによって新しく個物が現実存在し、属性の本

質を「表現」する。このような「変容」の連鎖が現実存在を作り上げていると考えられる。重要な点は、この連鎖の過程の中で同じものが二度生み出されることはないという点である。すなわち、現実存在に関してまったく同一の個物は生み出されえない。決定の連鎖における現実存在の順序が異なるからである。このような差異化によって個物の本質が構成されていると考えられる。この意味において「神の属性を一定の決定された仕方では表現する」(Eth.I.25.Cor.)という事それ自体が個物の本質なのである。

それがまさに「理性」を超えた「直観知」の対象となるものである。しかし重要な点は「直観知」への欲望は「理性」の認識からのみ出てくるという点(Eth.V.28.Pr.)にはかならない。つまり、個物の本質を十全に認識することの条件は、諸個物の現実存在を神の本質という同一性の中で認識することなのである。このように、現実存在における決定の連鎖の中で個物の本質が決定されるという解釈は、「理性」から「直感知」へと進むスピノザの認識の論理とも合致するのである。

この点にはさらに深い含意がある。しかしその点については論文の最後に言及しよう。ここではむしろ、このような解釈に説得力を持たせるために、それがスピノザの必然性の概念とよく調和するものであるという点を示していこう。

解釈の対象となるテキストは『エチカ』第一部定理29である。「事物の本性の中には偶然なものはなく、すべてが神の本性の必然性によって一定の仕方では現実存在しかつ作用するように決定されている」(Eth.I.29.Pr.)。このテキストには、問題となっているテキストに含まれる「一定の決定された仕方で」(Eth.I.25.Cor.)というフレーズと類似の「一定

の仕方で・・・決定されている」というフレーズが含まれている。この意味で極めて強いテキスト上のつながりが認められるといえるであろう。

このテキストの趣旨は事物の現実存在の偶然性を認めないという点にある。偶然性を認めるということは、個物が別の仕方で現実存在に決定されることもできたということを確認することになる。しかし、別の仕方
で現実存在に決定された個物はもはや同一の個物ではない。つまり、別
の本質を持つ別の個物なのである。だから同一の個物が別の仕方
で現実存在に決定されることもできたという表現は矛盾している。この意味に
おいて「いかなる事物もそれらが産出されたのと別の仕方、別の順序に
おいては産出されえなかった」(33Pr.)といわれる。この定理を根拠
にして、決定の連鎖によって生じる差異が個物の本質をもたらすと解釈
することができる。

実際、「個物の現実的本質」である「コナトゥス」(Eth.III.7.Pr.)の証明において、決定の必然性を主張する『エチカ』第一部定理29が援用されている。

「各々の事物の与えられた本質から必然的に様々なことが帰結する(第一部定理34による)。また事物はその決定された本性から帰結する以外のいかなることもなしえない(第一部定理29による)。したがって、・・・各々の事物が自己の存在に固執するように努める力(potentia)あるいはコナトゥスは、事物そのものの与えられた本質すなわち現実的本質にほかならない」(Eth.III.7.Dem.)。

すでに見たように事物の本質とは神の力を表現することである。しかし、力の表現には条件がある。すなわち「決定された本性から帰結する以外のいかなることもなしえない」のである。この条件なしに「コナトゥス」の証明は成立しない。このことは、個物を現実存在に決定する秩序を抜きにして個物の本質を考えることはできないということを意味している。つまり、個物の本質は現実存在における差異化によってのみたらされるのである。

まとめてみよう。個物は「変容」の連鎖の中で現実存在に決定されることによって差異化され、他の個物とは異なった仕方
で神の属性を表現することになる。それが同一属性において現実存在するそれぞれの個物の本質を構成しているのである。個物の本質は個物の現実存在に先立って与えられるのではなく、個物が現実存在に決定されると同時に決定されるのである。

3 身体の本質

『エチカ』第一部では一般的に「個物」あるいは「事物」(以下では「個物」に統一)の本質が問題になっている。つまりどんな属性の下に個物が考えられるかという点はまだ問題になっていない。それゆえ、本質に関する論理もまた極めて抽象的な次元で語られている。『エチカ』第二部でようやく延長および思惟の属性の下での「個物」が語られる。それは人間という個物にほかならない。

『エチカ』第一部定理25の系によれば「個物とは実体の変容すなわち神の属性を一定の決定された仕方
で表現する状態に他ならない」(Eth.

125Cor.)。h)が一般的に個物について述べられているh)とは、『エチカ』第二部定理10の系において人間という個物を主語にして述べ直される。「人間の本质は神の属性の様態的変容 (modificatio) によって構成されている」(Eth.II.10Cor.)。人間とは精神と身体とから成る個物だが、ここでは「身体の本質」に注目しよう。なぜなら、個物の本質の認識としての「直観知」とは「身体の本質」(Eth.V.22Pr)の認識であるとされているように、スピノザ自身が「身体の本質」をベースにして人間という個物の本質を提示しようとしているからである。そこで、個物の本質が現実存在の中で決定されるという上記の論理を身体の本質の生成の論理として語り直してみなければならない。再構築されるテキストは『エチカ』第二部定理13と14の間に挿入された補助定理群である。

そこでは「延長」の属性における「変容」である物体的個体が相互に区別される基準が設定される。「物体は運動と静止、速さと遅さに関して相互に区別される」(Eth.II.Lem.1)。これが「最も単純な諸物体」(Eth.II.Ax.1*)と呼ばれるものである。「最も単純な諸物体」は原子のように数的にのみ区別されるような単位ではない。むしろ、それらの区別は本質における区別であると解釈できる。なぜなら、すでに示したように、『エチカ』第一部定理28の解釈として個物の本質は決定の連鎖において構成されると考えられるが、以下に引用するように、「最も単純な物体」の発生はこの定理と同一の論理で説明されているからである。

「運動または静止している物体は、他の物体によって運動ないし静止に決定されなければならない。この物体もまた他の物体によって決定され、それもまたやはり他の物体によって決定され、こうして無限に

進む」(Eth.II.Lem.3)。

さらに、相互に異なった本質を持つ「最も単純な諸物体」から「複合された」(Eth.II.Ax.2*)物体が生成するという。「複合された」諸物体は、「最も単純な物体」のようにたんなる「運動と静止」によってではなく「運動と静止の割合」(Eth.III.Lem.5)によって相互に区別される。すると、「最も単純な物体」と同じ論理によって、一定の「運動と静止の割合」において各々の物体的個物の本質が表現されていると考えられるはずである。いうまでもなく人間身体はそのような物体的個体のひとつである。したがって各々の人間身体の本質はそれら固有の「運動と静止の割合」において表現されていると考えられるのである。

*補助定理群の中には公理1、公理2が二度出現する。ここに引用している公理1、公理2はともに二度目に出現するものである。

この解釈は『エチカ』の別のテキストによって確認できる。『エチカ』第五部定理22は「直観知」の可能性を証明する諸定理のひとつだが、この定理によれば「神の中にはこの人間身体やあの人間身体の本質」(Eth.V.22Pr)を表現する観念がある。つまり、個々の人間身体の本質を神は思惟しているという。では、人間身体の本質はいったいどんな存在次元に位置づけられるのであろうか。現実存在という次元に位置づけられるはずである。というのも、この定理の証明は「神はこの人間身体やあの人間身体の実存在だけでなくその本質の原因でもある(第一部定理25による)」(Eth.V.22Dem)とどうフレーズから始まっているからだ。事物の本質は現実存在の連鎖の中で決定されるという解釈を支

持するテキストとしてすでに引用した『エチカ』第一部定理25が根拠となることが引用文に明示されているのだ。

そこで、定理25に対する解釈と同様の解釈をこの証明に当てはめれば、神は無数の個体から構成される複合物として人間身体を現実存在に決定し、それとともに人間身体の本質をも決定したという読みが可能である。個々の人間身体はそれ自身の「運動と静止の割合」を成立させることで延長属性における神の力を「一定の決定された仕方」で表現している。その表現が人間身体の本質そのものなのである。

まとめると、個々の人間身体の本質は身体が現実存在する以前には与えられないし、したがって認識されることもできないのである。実際、人間身体が現実存在しないのにその本質など考えられるはずがない。冒頭に引用した定義の通り、本質とはまさしく「事物なくしては存在することも考えられることもできないもの」(Eth.III.D.2)なのである。

おわりに

以上の解釈の焦点は、個物が現実存在に決定される局面それ自体を個物の本質の決定の場として理解することにある。この解釈に含意される認識は、現実存在する個物の本質がその外部との関係なしには理解できないという認識である。無限に進む神の「変容」という因果的過程においては、現実存在する事物の本質を決定するのはつねにその外部なのだ。ひとことでまとめれば、神の属性とは個物に対して現前することのない外部のことであり、個物の本質とはそのような外部において決定されるものなのである。それゆえモーゲンス・レルケがスピノザの存在論を「絶

対的な外部性の存在論」(Laerke 2009:172)と呼ぶのは正しい。個物の本質とは個物に内面化されることができないという逆説的な結論がここから帰結する。

凡例

スピノザの著作は以下の略号によって表記する。

『エチカ』 Eth. Geyhardt(Ed.) 1972. *Spinoza Opera II*

参照テキストはローマ数字で各部を示し、定義等は以下の略号とアラビア数字で表記する。

定義：D. 公理：Ax. 定理：Pr. 証明：Dem. 系：Cor. 注解：Sch. 補助定理：Lem.

文献

- Deleuze, Gilles 1968. *Spinoza et le Probleme de l'Expression*. Minuit
- Gueroult, Martial 1968. *Spinoza I. Dieu*. Aubier
- Laerke, Mogens 2009. "Immanence et Exteriorité Absolue : sur la théorie de la causalité et l'ontologie de la puissance de Spinoza". *Revue Philosophique* n° 2. pp.169-190
- Laerke, Morgens 2018. "Aspects of Spinoza's Theory of Essence". Mark Sinclair ed. *The Actual and the Possible: Modality and Metaphysics in Modern Philosophy*. Oxford. pp.11-44
- Spinoza 1972. *OPERA II*. Heidenberg